「山へのあこがれ」

こぼれそうに実った柿の色や甲高いモズの鳴き声にも秋の深さをそこはかとなく思わせるような午後、東に面した書斎の窓から眺めると、取り入れ近い黄金の波が点在する島のような人里を埋めて、果てしなく続いている。

東北の空、遥か地平のあたり、早くも頂に雪をまとった木曽御岳が柔らかな陽ざしをいっぱいに受けて淡紅色に輝き、神々しいまでに整った姿を透明な空気を通して聳立させている。それは私達幼い頃の憧れの的であり、夢の対象であった。

山の美しさを発見した喜びを兄に分かとうとして、今は亡き弟は幾度私を呼んだことであろう。私達の怒りも悲しみも淋しさも白雲のように聳えるこの姿によって、幾度慰められたことであろう。それは慈母となって優しく話しかけ、或いは厳父となって烈しく鞭打つのであった。

私達は、この地に生を受け、共に成長し、物心を感じる年頃となり、兄弟という奇しき縁のもとに青春の喜びを分かち合ったのである。

まもなく弟も私も八高に通うようになり、私は登山に、弟は野球にそれぞれ運命の道を選んだのであった。もしどちらかが自己の選んだ定めのために、若い生命を犠牲にせねばならないとしたならば、それは危険な道を選んだ私自身でなければならなかったであろう。しかし現象は必ずしも確立の大きい方ばかりが現れはしなかった。

弟は最後まで自己の愛する部のために病を押しきって努力し、文字通り倒れた。以来、一年半、一時は病の床を離れ、私達の望遠鏡製作のため努力したけれども、再び床につき遂に立つことが出来なかった。

最愛の肉親を失った心の痛みは消えることなく、ことごとに涙をそそり、特に、変わることなく私達と共にあった御岳の山容を仰ぐ時、ひとしお胸にしみた。

弟亡き年の秋、私は飄然とただ一人、静かに、亡き弟の霊と共にありたいと願いつつ、黄金の波ゆらめく故郷を後にした。

車窓に展開する晩秋の飛騨路は、限りなく旅愁をそそる。寂寞の気は山間にみなぎり、幽愁の香は渓流にあふれていた。飛騨小坂で電車を降り、落合行きのバスに乗った私は、御岳への分かれ道に荷物のように置き去られた。地図を広げ、磁石を出して、生まれて初めて登る山の方向を定めて歩き出すと、もうそこには人間の香はなく、亡き弟とただ二人、あるのは燃えるような紅葉の山と紺碧の空とであった。

清浄な空気の香り、遥か尾根筋の梢をゆるがす木枯らしのすさび、ワラジを通して、ひしひしと身に染む土の感触、すべては喜びの世界であった。

弟と語りつつ時間を忘れて歩いた。四肢に染む冷気と、山陰の暗さに驚いてふりむけば、残陽は彼方の山頂に名残を留め、空は一面夕焼けけして、万象既に夜のとばりに包まれようとしている。やがて見出した小屋は、谷間に向ってさしかけられ、少し壊れてはいるが、夜露を防ぐには申し分なく、一夜の宿には思いもよらぬ幸運であった。

蝋燭に火をつけ、注意深く足を踏み入れる。まもなく、赤々と燃える炊事用のたき火の真闇の中には、なぜか人の気配さえする。

弟の霊ではないかと胸がはずみ耳をすませる。

やがて、火は燃え尽き、ワラジを脱ぎ、そのまま横になった。寒さが背筋を通って容易に寝つかれない。突然どこから来たのか数匹のネズミどもが、寝ている周りを駆けめぐり、足に触れ、頭に触れ、睡眠を妨げることおびただしい。起き出して再び蝋燭に火をつけ、とり散らした食糧をリュックに納め、天井の梁に吊り下げて再び横になる。鼻をつままれても分からぬ漆のような闇の中で、手を振り回してネズミを追っているうち、いつしか眠ってしまった。

目を覚ませば、既に明るい。ネズミどもの姿もない。急に人間らしい気持ちになって、鼻歌交じりに食事の用意に取り掛かった。下界並みに飯を炊き、味噌汁を作って、床の上に並べると、傍らに置いたワラジまで食器の一部のようにみえるのも可笑しい。一夜の宿を、振り返りつつ、再び歩き始める。足の指先が痺れるように冷たい。途中、道が二分し、一方は新しい道が続き、他方は踏みならした旧道が曲りくねっている。地図を広げて考えてみた。地図には新しい道は載っていない。但し、古い道は、地図の上では断崖の上を通っている。おそらく従来の道路の補修に堪えかね、新しい道を別の所へ作ったのであろうと思ったけれども、そのまま地図の道に従った。果たせるかな、足下に数段の滝を望む懸崖に差し掛かるや、桟道は落ちて道はズタズタに切れている。引き返そうと思ったけれども、この程度の悪場には自信があったので、無謀の仲間には入らないだろうと思って、岩のもろい急斜面にピッケルで足場を作って通過した。ほっと一息、汗を拭ってしばらく歩くと新道に合ってしまった。まもなく硫黄の香りが鼻をつき、谷川の水は濁り、温泉近しを思ううちに眼前がぽっかりと開けて濁川温泉が現れた。以外に大きく、人気のないガランとした家に恐る恐る入ってみる。大きな湯殿に、湯がとうとうと溢れ、緑の液体を湛えていた。これ幸いと早速裸になって飛び込み、首までつかってじっと目を閉じれば、羽が生えて天国にでも遊んでいるような気持となる。

ここからは靴に履き替えてゆくと、間もなく雪が現れ、天に聳える大木の群れも、次第に姿を没し、遂にははい松のみとなり、やがて見渡す限り累々とした岩石の山となってしまった。軽いラッセルをしながら九合目を過ぎ、飛騨山頂へと向かう。温泉に入ったせいか、急に疲れが出て、一歩一歩が非常に苦しい。

七貫を越してはいない筈のリュックが妙に重く感ぜられ、このまま山頂まで続くかどうかさえ心配となる。

突然、視界が紅に染まったので、驚いて立ち止まった。ああ、陽がまさに西の空、雲海の彼方に沈もうとしているのだ。私はリュックを置き、茫然と巨大な太陽の沈む光景に見とれた。永久に再び来ない今日の一日も暮れてゆくのだ。真紅の姿は、やがて最後の黄金の一閃を投げると、そのまま地平線に沈んだ。みるみるうちに周囲は暗くなり、たちまちにして星が輝き始めた。三千米の高さにおける生やさしくない寒さが突如として襲いかかってきた。私は辺りの暗さに追い立てられて、立ち上がり星の光の下に再び喘ぎ喘ぎ苦しい登高を続けた。

やがて、飛騨側頂上、五の池小屋に倒れんばかりにしてたどり着いた。しかし私はリュックを外すことも忘れ、そのまま飛騨側頂上の祠を目指し、石段のようになった岩片の一つ一つを踏んで行った。私には、何か急にそこに弟の霊があるのだと、漠然と考えられたからであった。そして暗黒の中で、永い祈りを捧げ再び戻って、小屋の扉を開け中に入り込んだ。

懐中電灯を頼りに、五の池に下り、薄氷を破って水を汲み上げ、寒さに手を震わせながら汁を作り昼の飯を噛み砕いた。

翌朝は、靴の凍結に弱らされた。五の池に下って、ピッケルをふるって氷を砕いたが、以外にも昨夜のうちに、底まで完全に凍って一滴の水すら求められない。雪を溶かすのも面倒であったので、朝食を止めて歩くことにした。乗鞍・穂高も、木曽駒岳も、夜明けの空に美しく浮かび上がっていた。烈風はたえず身体を動揺させ、骨までも凍る思いであった。青緑に凍結した二の池の対岸には、小さな雪崩の跡があった。

私は山頂にて、遥か故郷の方を望み、寒さに纏まらない頭を、しいて纏めて、弟のことを思い、故郷から見た、この山のことを思い出しつつ、肉体的には、甚だ苦しい若干の時間を過ごした。

帰路は、王滝口に選び、茫々と草の生えた御岳スキ－場を通り、道路の両側に無数に並んだ石碑の間を下った。私には三十度登山、五十度登山と記した人々の気持ちが初めて分かるような気がした。その人たちは、この山の崇厳さを信仰し、ただ帰依することだけを思って、同じ道を何回も、何回も登る人達なのであろう。石碑にあたる木枯らしは䔥䔥として、辺りのしじまを震わせていた。

地球の皺に過ぎない山は人間とどういう撃りを持つのであろうか。またその山に登ることは何の意味があるのだろうか。とりとめのない思いが巡り、回り燈籠の如く巡りあって、留まるところを知らず、次々と湧いては消え、消えては湧いた。近頃思い出すこともなかった幼い頃の友の顔、楽しく遊んだことなど、夏の夜の夢の如くに明滅した。しかし、やがて亡き弟の在りし日の様子が再び浮き上がってくると、忽然として現実にかえり新しい涙をもよおすのであった。

マメの出来た足をひきずりながら、王滝の郵便局長のお宅を訪ね、ここで泊めていただくことにした。

自家発電による直流の電燈の下で、主人の話に耳を傾ける。中でも熊狩りの経験談は興味深い。熊は引っ張ることを知って押すことを知らない。だから熊のいる穴を見つけたならば、村人を呼びに行く間、この熊が逃げ出さないように熊穴の入口に長い棒を一本立てかけて置くそうである。人々が得物を持ってやって来ると、熊公、棒を押せば外へ出られるのに、夢中で引っ張っている。人々を見て穴の奥へ逃げ込んだ時、木の枝でも、何でも棒で押し込んでやると、熊はこれを引っ張っては尻の後ろにやる。どんどん入れてやると、遂に出てきてしまうと。何か笑いきれぬものを感じながら聞き入った。

翌朝、バスに揺られ、木曽福島駅から、再び車中の人となった。帰ってみると黄金の波はいたる所刈り取られ、地は一変して黒い土となり、脱穀機の動く収穫の騒々しさが野に満ちていた。

やがて、人里は豊年の祝い酒に酔い、地は凍り、万物は荒涼とした冬景色へと変わってゆくのである。まもなく、伊吹おろしに乗って、ちらちらと雪が舞い、木曽御岳は幾日も幾日も吹雪の中に麗しい姿をかくしてしまうことであろう。

＜原稿＞



















